

課題 「医者」

「サイレント・ガーデン」

人物

臼井頼広 (36)

医者

徳村誠司 (36)

臼井の親友・役人

新山朱美 (24)

看護師

吾妻憲斗 (25)

研修医

斉藤公造 (62)

服役囚

田村正典 (51)

臼井の上司

○帝蘭大学病院・教授室前・中

装飾が施された扉。表札には内科教授室とある。

田村の声「本当にいいんだね」

○同・教授室・中

机を挟んで椅子に座っている田村正典

(51)。その前に立っている臼井頼広

(36)机の上には退職届と書かれた封

筒が置かれている。

臼井、穏やかな顔で

臼井「考えて決めたことですので」

田村「……その若さで私は君を准教授に指名している。その意味がわからないほど馬鹿ではあるまい」

臼井「期待していただいていたことは承知しています。ですが、私の親友たっての願いですから」

田村「親友のために出世を棒に振るか」

臼井「恩があるんです。それに私自身がやり

たいことでもありませんから」

田村、ため息をついて

田村「……受理しよう」

白井「お世話になりました」

白井、頭を下げて部屋を出て行く。部屋を出る直前に

田村「嫌気がさしたら、連絡してきなさい」

白井、田村を見る。

田村、回転椅子を回して背を向けて

田村「医局に戻すのは無理だが、私の名前で紹介状くらいは書いてやる」

白井、苦笑して深々と頭を下げると部屋を出て行く。

田村「……：よりによって、あんなところに行くか。酔狂な男だ」

田村、疲れたように椅子に背を預ける。

### ○倉見刑務所・前

森林地帯に囲まれた建物。閉ざされた鉄の門に寄りかかって眼を閉じてい

る徳村誠司（36）

タクシーがやってきて、出てくる白井。

徳村、門のそばにある守衛室に合図を  
すると、鉄門が自動で開いていく。

徳村に歩み寄る白井。

白井「久しいね、誠司」

徳村「ああ、一年飛んで96日ぶりだ」

拳を合わせる、白井と徳村。

徳村、鉄門が開ききると、ついてこい  
と眼で合図して入っていく。

白井が中へ足を踏み入れるとすぐに鉄  
門が閉まっていく。

白井、守衛室の男に会釈しながら

白井「嚴重だね」

徳村「当然だ。ここは病院である前に刑務所  
だからな」

徳村、思いついたように足を止めて振  
り返ると白井にネームホルダーを投  
げ渡す。

受け取る、白井。

徳村「お前のＩＤだ。それがなきやここにある部屋という部屋には入れん。ついでに入室退室全て記録される」

臼井「悪いこと出来ないね」

徳村「頼広」

徳村、真剣な眼差しを臼井に向けて

徳村「ようこそ。サイレントガーデンへ」

臼井、苦笑する。

徳村、笑い返して歩き出す。

臼井、建物の外観を見渡してから、ネームホルダーを首にかけ後についていく。

○同・中央玄関・中

入ってくる臼井と徳村。

受付カウンターには女性の制服警官が座っている。

臼井「ぱつとみた感じは病院だね」

徳村「元々は老人施設だった場所を国が買い取ったからな。牢をつけるのは金がかかっ

た」

白井「お役人みたいだ」

徳村「俺は役人だ」

白井と徳村、並んで廊下を歩き出す。

白井「患者は何人？」

徳村「約三十人。人手が集まればもっと増や

す予定だ」

白井「そんなにいることが驚きだけどね」

徳村「そうでもないさ。受刑者の高齢化率は  
どんどん進んでいる。それは刑務官も同じ  
だ。医療刑務所はもはやパンク寸前。だからこそ、ここのような場所が必要なんだ。

末期患者専用の、ターミナル施設がな」

白井「皮肉なネーミングだね。でもターミナルケアだけじゃないだろ。難病とか一般病棟じゃ手に余る病人の体の良い受け皿に使われているんじゃないか？」

徳村「さすがだな……くだらん行政だが任せれた以上、俺は結果を出さなければならん。無理を頼んだ、すまん」

白井「いいさ。君には借りがあるしね」

徳村「いつの話だよ。ギブアンドテイクは成立してたはずだぞ」

白井「僕が勝手に思ってるだけさ」

そこへ慌ただしくやってくる刑務官A。

徳村「おい、どうした？」

刑務官A「徳村さん。林田医師はどこにおられますか？ 診察室で患者が急変して」

徳村「診察室？ 林田がいないなら誰が診察してる」

刑務官A「それが吾妻医師が診ていまして」

徳村「そいつは研修医だろ。林田の野郎、押しつけやがったな」

白井「僕が行こう。誠司、案内を」

徳村、舌打ちをして

徳村「館内放送で呼びかけろ。俺の名前出せば来るはずだ」

刑務官A「はっ」

刑務官A、敬礼してから走り出す。

白井「優秀な医者が集まっているみたいだね。

さすが誠司の人望だ」

徳村「うるさい。行くぞ」

走り出す、臼井と徳村。

○同・診察室・中

診察ベッドで横たわり苦しんでいる斉藤公造（62）。両手には手錠が掛けられている。

斉藤を介抱している新山朱美（24）。

部屋の隅で状況を見守っている刑事官B。

出入り口付近で狼狽えている吾妻憲斗（25）。

朱美「吾妻先生っ！ 指示を」

吾妻「えっと、えっと……」

吾妻、震える手でメモ帳をめくっている。そこへやってくる臼井と徳村。

臼井、吾妻の肩に手を置いて

臼井「目の前の患者をみたほうが情報は得られますよ」

吾妻「……え、あ」

臼井、吾妻をみて微笑む。

徳村「新山、お前がいて何も出来ないのか」

朱美「看護師には限界があるんですっ」

臼井、斉藤を仰向けに寝させて

臼井「どこか痛いですか？」

斉藤、腹を押さえて苦しみながら

斉藤「腹が、腹が痛え！」

臼井「お腹触りますね、ここ痛いですか？」

臼井、腹を触ると斉藤が悲鳴を上げる。

臼井「こっちはどうですか？」

臼井、別の腹の場所を触ると斉藤がまた悲鳴をあげて口から泡を吹き始める。

臼井、ペンライトを取り出して

臼井「ちよっと眩しいですよ」

臼井、斉藤の両眼にライトを照らして  
を見ると、ゆっくりと椅子に座る。

臼井「新山さん。彼のカルテは」

朱美「え？ あ、はい」

朱美、戸惑いながらカルテを渡す。

カルテを見る臼井。

斉藤、苦しみ続けている。

徳村「おい、頼広。どうするんだ」

臼井、カルテを見ながら

臼井「それ以上続けても、時間の無駄ですよ」

徳村「なに？」

そこで斉藤が苦しむのピタッとやめる。

斉藤「よくわかったな、ドクター」

斉藤、何事もなかったように起き上がる。

啞然とする徳村、新山、吾妻、刑務官

B。

徳村、斉藤の胸ぐらを掴んで

徳村「……貴様、仮病とはいいい度胸だな」

斉藤、口元を拭きながら

斉藤「騙されるほうが悪いんですよ、研修医の兄ちゃんが可愛かったからついね」

吾妻、悔しそうに唇を噛む。

臼井「でも痛かったのは本当でしょう。実際

には腰あたりじゃないですか。まあ我慢出  
来ないほどではないと思いますか」

齊藤、はっとする。

臼井「急に痛くなつてついでに悪戯をしたつ  
てところですか」

臼井の見るカルテ、膀胱癌ステージⅣ  
とあり、余命半年と書かれている。

齊藤「へへっ、これはまた優秀な人を連れて  
きたもんだ、お役人さんよ」

徳村、舌打ちをして齊藤から手を離す。

臼井「痛かったら素直に言ってください。言  
わなきゃ伝わらないこともありますよ」

齊藤「今さら何をやってもね」

臼井「私は医者であなたは患者です。服役囚  
の前にね」

臼井、齊藤を真っ直ぐ見つめて

臼井「さあ。診察を始めましょうか」